〔特別企画〕
総合情報学部のオーラルヒストリー　第２回

教員が語る学部の歴史２

桑原　尚史

イントロダクション

紀要委員会では，紀要改革プロジェクトの一環として，学部長を勤められた先生に「学部の歴史」を話していただくという特別企画を立てております．企画趣旨の詳細は『情報研究』55号に詳しく書いておりますので，ご参照いただければ幸いです．

今回はその第２段として，2022年度をもって退職される第８期学部長をされた桑原先生にお話をうかがいました．桑原先生は開設時に助教授として着任され，2015年４月から2020年10月という５年半にわたって学部長をされました．桑原先生の各行事におけるご挨拶・スピーチの数々は，優れた落語家が語っているような名調子で，いつも大勢が魅了されていました．この度の「教員が語る学部の歴史２」では，その名調子の一端を，なんとか紙面で再現しようとした（不可能にチャレンジする）試みです．

2022年10月３日午後，総合情報学部学部長室におけるインタビューは，メイン担当・地主とサブ担当・米澤の両名が行った．米澤は，都合が悪くなった谷本紀要委員長の代理として参加している．なお編集・校正には桑原先生，地主，米澤，および紀要委員会があたった．
（以下，発言者の敬称略）

〈創設時に着任しての思い〉

地主

最初に，創設された総合情報学部に赴任されて，感じられたことや考えられたことをお伺いしたいと思います．関大ご出身ということで，母校にご着任される形になったのだとも思いますが，如何でしたでしょうか．

桑原

総情に着任しました時に，私は30代半ばでした．同僚には40代・50代の人々が多く，その方々が創設時の学部運営を担われていたのだと思います．

また，母校と言っても私は文学部出身ですので，学生時代を過ごした千里山キャンパスと比べたときの，高槻キャンパスとの環境の相違が強烈でした．千里山キャンパスは総合大学のキャンパスです．いろいろな施設，厚生施設や運動施設など，様々な学生の活動に関する施設が，文化系の活動に関する施設も含めて，極めて充実しておりました．演劇のホールがあった

りとかそういったことです．総情も現在でこそ，コミュニケーションルームができたり，若干の改善が図られてきましたが，最初はそうしたものが全くなくて，学生の居場所がありませんでした．学生の課外活動ができないという点で，すごく懸念を覚えました．

そういう面は少し改善されたといえども，今でも大きくは変わっていなくて，学生のカリキュラムの取り方にも影響を及ぼしているのではないかと思っています．すなわち，週４日だけ登校するようにしようとか，あるいは金曜日に来るなら１時限から４・５時限まで授業で埋めようとかいった行動に結び付いているのではないでしょうか．自分の関心とか学びたいことよりも，便利さと言うか効率性というものを重視して，履修科目を選択すると言うようなことです．

地主

確かに，そのような感じですね．

桑原

このようなことを言ったら叱られるかもしれませんけれども，やはり１学部１キャンパスというのは，大学のあり方としてはいびつなのではないかと思います．いろいろな学部の学生が，授業以外の様々な場で触れ合い刺激し合うという体験が必要なのではないでしょうか．そういう意味では，個人的な理想を申しますと，希望に過ぎませんが，20年とか30年後には（もう設置基準も緩和されていることですし），千里山キャンパスに統一して全学部を集中したら良いのではないかと考えています．

そしてまた，体育関係の施設のようなものならこの高槻キャンパスにあってもいいでしょうし，高校を作るとか，研究施設を作るとかしてもよろしいのではないでしょうか．一つのキャンパスに集中することで，図書館も一つで済みますし，事務の方々も各キャンパス間を行ったり来たりしなくて良くなりますから，効率性も大きく改善されると思います．このことは，着任時からずっと考えていたことでした．

〈教授会の今昔〉

地主

創設当初の教授会はたいへん長時間にわたったとうかがっています．その後の様々な経緯を踏まえて，現在を見て感じられていることや考えておられることを，うかがいたいと思います．

桑原

開設当初の頃，学際学部というものは全国的にも未だほとんどありませんでした．開設メンバーの方たちは，様々な専門学部から集まってきていたわけです．そうすると，それぞれの分野の方が，それぞれのやり方なり，ポリシーなりといったものを主張されることとなって，教授会が長時間続いてなかなかに終わらないという状況が生まれたわけです．しかし，次第に，それぞれの領域が他の領域を尊重するという雰囲気が，生まれ出てきたように思います．「西の国には西の国の正しさがあり，東の国には東の国の正しさがある」というような形で，他の

分野のあり方を尊重する．研究スタイルであれ教育スタイルであれ，他の領域のスタイルというものを認めるということですね．他の言葉もあるかもしれませんが，鷹揚さと言いますか，寛容さと言いますか，そういったものが醸成されていったのではないでしょうか．そのようにして，教授会の時間も短縮されていき，様々なルールも整備されていきました．そうした短縮化の到達点が私の学部長時代であったのだと思います．

このような経緯から現状をみると，これまでは開設の頃から継続して在任されてきた先生方がこれまで非常に多かったわけです．ところが，開設時に40代や50代で赴任された方々が，20年余り経過して，退職していかれる．今ちょうど教員の入れ替え時期と言うか，交代時期にあたっているのだと思います．ヒストリカルコンテクストとして，様々な紆余曲折があり， こんなことをしたら後でトラブルになったとか，いろいろひと口では言えないこともあったりしたなかで，まあこれがいいだろうということになってきたわけです．例えば ゼミの選び方や募集の仕方にしても，あるいは人事の仕方にしても，このようにするのが一番良いだろうということですね．どのような形をとるのが良いのかについて，暗黙の了解が形成されていったのだと思います．インプリシットのものですよね．

しかし，このヒストリカルコンテクストというものは，経験を共有していない人へ伝達することが難しいものです．それを構成する情報量が膨大であるだけでなく，知っている人々の間でも個人個人でそれぞれ記憶が曖昧であったり，個々人で解釈が違ったりもするものです．そうすると，新任の方々には説得力を持たないと思うんですね．「前からそうだった」というだけでは難しいでしょう．

すなわち現在は，ルールのリコンストラクションの時期に入っているのだと言えると思います．ただし， 厳密にルールを作っていこうとすると，それは大変です．経済学部なり法学部なりであれば，それぞれの構成員に一定の共通の理解がありますし，ルールもかなり単純なもので済むと思うんですが，総合情報学部のように多様なバックグラウンドの方々が集まっている中で，評価なり人事なりのルールを詳細な作成しようとすると，最終的にルールは膨大なものになってしまうのではないでしょうか．ルール作りに，大変なエネルギーを投入しなければならないということになってしまうように思います．

先ほども使った喩えですが，「西の国には西の国の正しさがあり，東の国には東の国の正しさがある」ということですよね．そうなると，作成すべきルールは国際法のような，緩やかなルールで良いのではないでしょうか．そして，そのルールで判断できないときには，その時点でみんなで判断する，すなわちその時々の構成員の良識で判断するというような形にしないと，ルールだけが緻密化し，膨大化していってしまう危険性があるのではないかと思います．

〈総情の革新性について〉

地主

総情が次々と新しいことをしたので，千里山キャンパスの他の学部も続くことができたとい

う話を聞いたことがあるのですが，如何でしょうか.

桑原

それについては，必ずしも総合情報学部で考えて進めたというわけではなくて，設立時の準備委員の先生たちが，そういうことを考えられていたということだと思います．また，設立時の教員の大半を，千里山キャンパスの諸学部からの先生方が占めていたんですね．そういう先生方が考えられたわけで，千里山キャンパスの元の学部ではなかなかできなかったことをやろうとされたのではないでしょうか．外部から来られた新任の先生方は，むしろ戸惑いを感じられたのではないかと思います．例えば，セメスター制度の導入についてでしたら，「どうしてセメスター制度なんだ？」とか,「休講すると補講しないといけないのは嫌だな」とか，ですね.

革新の多くは，開設準備委員会の先生方のアイディアであったのだと思います．そういう点で，準備委員会の先生方は，先駆的な考えをもった素晴らしい方が集まっておられたように思います．また，文科省の進めようとしていた方向と合致する点も多かったと言えるようにも思います．学生評価制度とかシラバス制度などが，ちょうど出てきたところでしたね．そういうものを積極的に取り入れていったという面もあったのではないでしょうか.

〈入試について〉

地主

設立当初の総情の入試は大変に高倍率であったとうかがっています．入試の方法についても，いろいろ独自の工夫をされていたとうかがっていますが.

桑原

昨今，きわめて大きな入試改革がありました．後期日程がなくなり，そしていわゆる前期日程，２月入試のみになりました．その前期日程においても，それまでは一日に一学部しか受けられないというのが基本形であったわけですが，どの学部でも受けられることが可能な日が増えて来ました．そうなると，入試科目などでの総情の独自色が出しにくくなってしまいました．私の学部長最後の年が，ちょうど，後期日程入試がある最後の年でした．私は，後期日程廃止にずっと反対しておりました.

総合情報学部は，それまで，３月入試の募集定員に結構な人数を割いていたんですね．そこで入学人数をコントロールすることができたし，そしてまた「国立大学は落ちたけど」っていう学生が来たりして，かなり高い倍率で時に10数倍や20倍に達しているような時もあったのです．そうした高倍率のときには，かなり良い学生を受け入れることができました.

また，他学部と同日に試験することになってしまいますと，どうしてもキャンパス環境の快適性や交通条件において劣ってしまう総情には，なかなか良い学生が受験してくれないといったことが生じてしまったのではないでしょうか.

当時，後期日程を何とか残してほしいとずっと交渉し続けました．入試担当の副学長も含め

た諸方面に陳情を重ねましたし，入試センターの人が何回も総情に説得に来ましたよね．結局はダメで，最後は「どうしてもやるのなら，おたくだけで実施してください」と言われてしまいました．学部長の任期ももうすぐ切れるという時期でした．その時は準備不足でそんなことを次年度から実施するという判断はできなかったんですけど，後で考えてみると，不可能ではないかもしれないと思うようになりました．

例えば３月の初めあるいは中旬に実施する．入試問題も作ってくれませんので，例えば共通テストの数学と英語の得点を使う．ただ，何らかの形で独自の試験をやらないといけないんですね．面接では手間がかかり過ぎるし，小論文・エッセイでは採点者の個人差がでてしまう．何らかの客観的な基準を設けることができて，入試の時間も１時間から１時間半程度，採点の時間も限定的に収められるものとなると，内容は限定されます．数学の入試問題を作成しておられる先生たちが総情におられますので，お願いできないかなとも考えました．「理数系に強い学生がほしいのだ」というメッセージを打ち出して，独自の数学のテストをやって，数学に強い学生を入学させてデータサイエンスの旗手になってもらうんだっていうような形ですね．

しかしそうすると，もちろん，この学部の事務局あるいは先生方，特に数学の先生方は出題者でもあるので，非常に負担が増えてしまいます．ただ，最初は入学者を10名や20名に留める．実施当初には共通テストの基準点を高く上げておいて，よっぽど優秀な学生しか受けに来ないという形で試験的にやってみて，そしてだんだんと基準点を下げて受入数を増やしていくというような方法もあると思うんですね．

この学部は，他学部と一緒の入試ばかりでは，他学部よりも優秀な学生がなかなか来てくれなってしまうのではないでしょうか．そうした状況を改善するには，後期日程をこの学部で実施するのも１つの方法ではないかと考えています．

米澤

実際に私の周辺でも，国公立に入ってるのに「関大落ちた」と言っている人が結構いたように思います．国公立に入るぐらいの勉学の体力のある学生が，そういうタイミングでチャレンジしたいと思ってくれる可能性もあるんじゃないかなって思います．そういう方式が成立したら，とても素晴らしいなと思いつつ，うかがいました．

桑原

文系なんだけれど数学も得意とか，理数系で特に数学が得意とかいう，そんな２パターンの学生をねらって受け入れるなら，総合情報の文理融合という特長にも適合することになるのではないでしょうか．数学の入試をする場合は，難題１つで良い，考えさせる問題１つで良いと思うのですよね．ただし，まったく一からのことになりますから．ミスしないように入試要項まで作るとなると，大変な労力になりますよね．それでも，一つの選択肢なんじゃないかと思います．関西大学は後期日程を，地方入試も含めて全国的に実施していましたから，それを一度にやめてしまうというのは，大変な影響力をもった決定であったと思っています．

地主

私の前任校でも後期日程入試をやめていきました．教員の多くは３月をフルに研究に使えると喜んでいましたが，入学してくる学生の質という点ではどうだったのかなと思っています．

〈学生に贈る言葉について　imageability の大切さ〉

地主

米澤先生からの質問なのですが，「桑原先生が卒業式などで学生に対して贈る言葉が心に沁みました．どのようにして，あのような言葉が生み出されたのでしょうか」という，質問に移りたいと思います．

米澤

桑原先生のそうしたスピーチの中には，さまざまな喩えが出てきたと思うんです．そうした喩えを卒業生へのメッセージにつなげるところ，なかなか私だったら思いつかないなっていうところとかが，たくさんありました．卒業生向けのメッセージに何を入れようかと常日頃から考えていないと，私だったらあのような言葉にはできないなと考えてしまいます．

学生への暖かい思いをもちながら，学生を独立した存在として一定の距離も置いている，そういうすごく適切な立ち位置からのはなむけの言葉，励ましの言葉は素晴らしすぎてちょっと忘れられないように思います．先生が『情報研究』に書かれた文章でも，研究分野外のこともいろいろと調べておられることがうかがわれるように思えました．そうすることで，様々な視点を含むようなメッセージを学生たちに送っておられたのかなと感動していました．

桑原

実のところ，人前で話をするのは苦手なんです（笑）．ただ，学部長と理事兼任でしたので，どうしても話す機会が多くなるんですよね．父兄懇談会で話したりとか，教育講演会で話したりとか，もちろん卒業式もそうですけどね．それと，学生の中で，「学問とはすごいものだ」といいますか，学問への敬意のようなものがだんだん無くなってくると，講義においても，少し具体的にしないといけない．あるいは，相手が今どこまでわかってるのかというようなことを想像しながら，話さないといけない．面白さもあり具体性もあって，イメージができるようにしないと，講義が成立しないようになってきたわけですね．

まあ，十三の店などでいろいろな方と飲んできたことで，鍛えられたということもあるかもしれませんね（笑）．ろいろな人たちと話をする場合，論理の筋道がシンプルで，なおかつイメージがし易いように話す必要があると思っています．

米澤

様々な立場の多くの方々とお話をする中で，イメージをしてもらう工夫とかユーモアを加える工夫とか，そういうものによって引き付けながらお話を伝えてくっていう努力を，たくさんたくさん重ねてきた結果が，あの贈る言葉なのですね．

桑原

この点は，入試とも関わりがありますよね．偏差値もキャンパスの快適性も受験に関わる要

因ですが，何かを学ぼうとして学部を選ぶ学生も当然いるわけですよね．そうした学ぶ意欲のある学生をとろうとすれば，なんとかたくさんの学生に受験してもらわないといけないことは自明だろうと思います．うちの学部のパンフレットやホームページを見ると，総合情報学ということで，情報について学ぶんだろうなということは判ると思います．しかし，その次をみると，メディア系とか，社会情報系とか，コンピューティング系とか書いてある．ここでイメージが途切れてしまうんですね．メディア系はまだましかもしれませんが，それでもすべての高校生にとって imageability が高いかは疑問です．さらに，社会情報システムというと，なかなかイメージできないのではないでしょうか．それを，ビジネスとかマーケティングとか言うと，高校生にとっても imageablity が高まると思うのです．

結局は実現できなかったのですが，学部長時代に，将来構想の中でカリキュラムを検討しようとしました．科目を変えるわけじゃなくて，この学部のカリキュラムの見せ方が良くないので変えたいと考えました．７つぐらいの履修モデルみたいなものを作って提示すれば，良いのではないでしょうか．たとえば，マーケティング・モデルとか，グラフィック・モデルとか，あくまでも卒業要件などではないけれど，こういった履修の仕方がありますよ，というモデルです．

米澤

広報委員会に入っていた時に，私もそれぞれの学生のカラーパレットを見せようと考えて，他の先生方と共に提案しました．３つの系から３つのモデルしかないということではなくって，もっといろいろあることを具体的に見せれば良いのではないかと，考えました．

桑原

カラーパレットはいいですね．私が説明に使っていたのは，食い意地が張っているので，ビュッフェなんです．肉や魚また野菜が並んでいる中で，どう選び，どう料理するかという例えを考えていました．その料理の典型例が履修モデルです．７プラスマイナス２ぐらいがちょうどいいのではないかと考えていました．卒業単位とは関係ないので，フレキシブルに変更していけばいいと思うのです．今なら，データサイエンス・モデルみたいなものを良いのではないかと思います．学科でもコースでもないので，文科省に届ける必要もない．

イメージの形成のし易さという点では，この学部のカリキュラムの良いところが，受験生に伝わっていない．個々の先生の研究内容を示すという話もあるけれど，そこまで見てくれる学生は少ない．多くの学生は，パンフレットの最初の２頁まで，at a glance しか見てくれない．そこで，興味をもってくれると３頁まで進んで研究内容もみてくれるのですね．在学生にとっても，モデル提示が良い影響を与えることができるのではないでしょうか．楽勝の科目を揃えるのではなくて，学びたい内容に適した科目を履修するようにですね．ただ，ピックアップされる科目とされない科目が出ると問題になります．ある程度は，平等性が必要だと思います．まあ，私のプレゼンテーションの仕方が悪くて，なかなか通らなかったのですが．

米澤

カリキュラムに関しては議論になりやすいですよね．QR コードで全ての先生の科目や組み合わせを見せるようにできるのではないかとも考えたことがあります．

桑原

カリキュラムについて議論することは大変重要だと思います．そして，その際，革新的な意見も，サイレントマジョリティである意見も含めて，それぞれの宣戦がどのようなお考えをお持ちなのかを知ることが重要であったと思っています．

〈学部長までの経緯と学部長として気をつけたこと〉

地主

最初に学部長に就任された時は，前任の上島先生が突然に倒れて亡くなられて，急遽，後任に選出されたとうかがいました．その後，再選されて，３選までされたということですが．

桑原

そうですね．卒業式に出ておられた先生方も多いと思うのですが，（上島先生が）突然にお倒れになられて亡くなられてしまいました．そのときは，色々な手続きあるだろうし，入学式のこともあるだろうということで，４月１日までに後任学部長を決めないといけないということになって，急遽選挙をしましょうとなったわけです．当時，私は副学部長を務めておりまして，われわれは上島先生に指名された信任職ですから，新たな学部長が選ばれたら，新たな執行部を構成されることになるのだろうということで，のこり５日間ほどでこの執行部も終わるのだなと他の執行部のメンバーと話していました．

しかし，心構えもなく突然に（学部長に）選出されましたし，上島先生自身も着任後の日が浅くて，なさりたかった事もまだ抽象的な段階でした．４月以降どのような方針でということは少し話したこともありましたが，基本的に不明でした．ワンポイントリリーフとしてなんとか１年半をしのごうと，考えました．覚悟や信念をもってなったわけではないので，みなさんにご迷惑をおかけしたのではないでしょうか．

地主

でも，その後，再選，３選となられたわけですよね．

桑原先生

学部によっては１期しか勤めないことが慣例のところもありますが，１期ですといろいろなことの学習段階で終わってしまうことになりますよね．私も１期目の時には，理事の仕事とかまったく知らない状況で始まりましたからね．

地主

先生は文学部ご出身だったので，本部などに多くの人的ネットワークをお持ちだったことが，学部長職としての執務上に役立ったのではないかというお話もあります．

桑原先生

私の大学院生のころは院生協議会というものがありまして，私が文学研究科の代表だったんですね.

理系は別ですが，文系は院生棟というところに集まっていました．しゃれた洋風の建物で，地下室もありました．そのころ一緒だった方たちが，私の学部長時代には様々なポストについておられたりして，各学部のいろいろと事情を教えてもらうということはありましたね.

私は博士課程の大学院は社会学研究科だったんですね．当時，文学部の心理学は修士課程までしかなかったんです．そして，修士の後の就職も決まっていたのですが，文学部の先生と社会学部の先生とが，偶然に教員食堂で出会って一緒に食事して，私の（博士課程への）進学の道が開けたわけです．それがなければ，私は証券会社か何かで働いていたのだろうと思います.

地主

先生は，その後，鹿児島の大学に着任されたとうかがいました.

桑原

女子大でした．当時，鹿児島県では４年生の大学に進む女子学生が極端に少なかったので，かなり裕福な家庭の学生が大学に入ってきました.

ただし，小さな大学でしたので，総合大学と比べると，いろいろなリソースが少なかったですね.

それと比べると，総情ははるかに整っています．しかし，もっと学生の課外活動ができるようにする必要があると思うのです．学生が大学に来るインセンティブを高めておく必要があるのではないでしょうか.

コロナで遠隔授業が広く使われたことで，対面授業に求めるものが変わると思うのですよね．これならオンデマンドで良いのではないかと，言われてしまう場合もあるのではないでしょうか．何らかの付加価値が求められるようになっていくのではないでしょうか．今後，大学も基礎科目のようなものは，かなりオンデマンド方式に変わっていくのではないでしょうか．内容が標準化されている科目はそのようになるように思います．また，現在のパイロット校入試後の準備授業でもオンラインで採点までできているので，同じようにできるのではないでしょうか.

コロナの経験が，長期的に，どのように大学に影響してくるのか，先生方も気になるのではないでしょうか．今まで対面授業で当然だろうと思っていたことが，変わってしまうのではないでしょうか．会社でも，労働者が会社に来るのが当然だろうと思っていたのが，変わって来たように．視点の違い，立場の違いによって，何らかの齟齬が生じてくるのではないでしょうか．大学教育には大きな影響がでるのではないかと思います.

米澤

現在も要配慮の学生向けのことを考慮すると，対面用の準備だけでは済まないですよね．これからは，多様な希望への対応が必要となっていくのではないかと思っています．対面でならその場で理解してもらえることを，すべて説明として記述しないといけないとなると，業務量は大きく増加してしまいますよね．企業でも，全面的にオンライン可能という対応をしているところもありますし，なかなかそうできていないところもありますよね．

桑原

ただ，私には，こうした変化をあまり信用していない部分もあります．グローバル化も一時は流行しましたが，今はさっぱりですよね．フランス革命のときのように，王政から共和政へと，そして王政復古にというように，揺り戻しがあるのではないでしょうか．多様化というものも，そのようなことではないでしょうか．

米澤

先生方がこれまでは学部内のリソースを充実させてきたからこそ，総合情報学部も様々な要望に答えることができ，発展してこれたと思うのです．

桑原

私が学部長の仕事として最も優先していたことは，研究し易い，教育し易い環境を作ることでしたね．将来に向けての大きな方針などは考えていなかったですね．ワンポイントリリーフでしたからね．

ある意味で，環境に変化がないということが結構重要だと思うのです．いわゆる「場が落ち着いている」ということが大事だと思うんですよね．その一環として，文科省からいろいろな要求がきても，その内容が本学部にとって内在的な重要性の低い場合には，あまり過剰な対応をしないようにしました．

地主

その点は，前任校との比較で実感していました．様々な大学では大きな変化が求められていますが，この学部はかなり静穏だなあと思えました．様々な制度改革は良い意図をもって導入されるのですが，成果を上げることはなかなかに難しいですね．

桑原

産業革命にしても市民革命にしても，社会が混乱してしまうわけですよね．大学も制度改革に関しては，きわめて慎重であるべきです．改良するつもりが改悪になることも多いですよね．しかし必要な変革はおこなわなければなりません．ここにジレンマがあります．もの

〈これからの総情に期待すること　フレキシブルな変化〉

地主

そろそろ，最後のパートに入りたいと思います．第１にこれからの総情に期待すること，世の中の期待に応えること．第２にこれまでの歴史からの教訓，第３に総合情報学部へのメッセージ＝贈る言葉について，うかがいたいと思います．

桑原

私のような「遊び人」にそんなことを聞いてもだめですよ（笑）．ただ，この学部はいろんな形に姿を変えることができるという特長があると思うのですよね．固定した学科や専攻がないですからね．50人の先生がおられますが，毎年２名ぐらいがお辞めになっていくと，５年で10名入れ替わるわけですよね．その時に，エッセンシャルな科目であれば後任を探すけれども，それ以外は必要性の高い内容の科目に対応した人事をしていけば良いのではないでしょうか．そうすると，かなり社会の変化にフレキシブルに対応していくことができると思います．

地主

人事委員会で，のぞましい科目を検討するということでしょうか？

桑原

人事委員会では人数が少ないと思います．むしろ，メディア系，社会情報系，コンピューティング系などのそれぞれの領域で関連の先生に集まってもらって，それぞれの領域では現在どのような科目が必要なのかということを議論してもらうとかでしょうね．

おそらく，これからかなり混迷の時代，社会情勢が大きく変化する時代が来るのではないでしょうか．国際関係もそうでしょうし，科学技術の進展とかで，社会が大きく変わっていくと思います．そういう変化に対する sensitivity というか，敏感に対応していく力といったものが必要だと思いますね．

ただ，そうした議論を教授会でするのは不毛な結果に終わりがちなので，その前に，ある程度，みなさんの考えを吸い上げるとが必要なのだと思います．そして，なによりも学生に何を学んでほしいのかということが重要だと思います．

米澤

いろんな科目が繋がって，同じところを目指し始めているように思うのです．新しい先生がはいってきて新しい分野を担当するということもありますが，個々の先生の研究領域も十年前では予想できなかったテーマに移ったりしているのですよね．そういう変化を自由にしていけるような，研究教育に集中できる落ち着いた環境があるといいなと思うのです．

桑原

最近は，社会が，大学教員にオールマイティであることを求めるようになってきたと思うのです．研究もやれ，教育もやれ，社会連携もして，資金も獲得しろというわけですよね．もっといろんなタイプの先生方がいても良いのではないかと思います．私は何もできませんが，みなさんの自尊心を高めることができたのではないかと思います（笑）．

昔「大学白書」という本がありまして，学問型，芸者型，マスコミ型とか，先生たちのいろいろな型が書かれていましたが，いろいろな型があって良いと思うのです．一つの型にあてはめてオールマイティを求めるのは，人間のことをあまりご存知ない考え方のように思いますね．

地主

海外の大学においては，教育専門のフルタイムの教員というポストができてきていますね．日本の非常勤講師の制度とはちがって，そうした教育担当の先生たちも，きちんと処遇されるようです．また，研究資金をたくさんもっている教員は，その資金で自分の代わりに教える教員を雇えるというところもありますね．いろいろなタイプの教員の存在を認めるということの，一つの在り方なのかもしれません．いろいろな先生がいると，人材の幅が広がって，面白いかもしれませんね．

〈ゼミについて〉

桑原

ゼミが終わって廊下を歩いていくと，米澤先生のゼミの部屋が生き生きとしているんですよね．頑張っておられるなあと思いますね．

米澤

今年のゼミ生はたまたま活発な学生が集まってくれたのだということだと思います．年によってゼミ生のカラーは変わりますよね．

桑原

ゼミの分属については，いろいろ議論があると思いますが，個人的にはある程度うまくいっているのではないかと思っています．もちろん，改善点がないわけではありません．これから議論を重ねてより良いシステムを構築されていかれることを期待しております．

地主

ゼミについては，慶応や早稲田の社会科学系などは巨大なので，優秀な一部分だけが入るという制度になっていると言われますよね．

米澤

私の母校では，ゼミの選択が科目履修に近くなるような制度を採用していました．学期毎に変わることもできました．

桑原

以前に，他大学のゼミ選択も仕方を含めて，そうした議論もいろいろとしたように思います．でも，結局は今のやり方に落ち着いたのですね．

〈最後に〉

地主

では，ラスト・トピックスに移りたいと思います．総合情報学部の歴史から今後に活かすべき教訓とか，総合情報学部へのメッセージとか，これまでにもいろいろとお話しいただいたと思いますが，改めていかがでしょうか？

桑原

学部の歴史からの教訓というのは，決定的なことはなかなか言えないですよね．ただ，一つ

推薦しておきたいのは７つの履修モデル，カラーパレットモデルですね．私のビュッフェモデルという名称から変更しておきたいと思います（笑）．

地主

なるほど．ご説明いただいた履修モデルの提示が，お勧めということですね．総合情報学部のカリキュラムに関する imaginability を高めていきたいものですね．

米澤

いろいろと大変楽しくうかがわせていただきました．先生のような心の余裕がないと見えないものを，お話しいただいたように思います．

地主・米澤

本日は長時間にわたって，貴重なお話しをお聞かせいただいて，まことに有難うございました．

追記　約二時間のインタビューの間，桑原先生のユーモアで笑いが絶えないだけでなく，座談の巧みさを堪能させて頂きました．「遊び人」を自称される桑原先生のお話し全てを活字にできないのが，残念です．